

報告3：虞 萍（南山大学）

謝冰心の日本訪問に関する一考察

中国で「文学の祖母」と呼ばれる冰(ひょう)心(しん)（1900-1999、日本では「謝(しゃ)冰(ひょう)心(しん)）」と呼ばれている)は一生を通して8回来日した。謝冰心が日本滞在中に残した作品はやや少なく、『冰心年譜』（卓如著、海峡文芸出版社、1999年）に記載されているこの時期の謝冰心の行動も十分説明されたとは言えない。5回目と6回目の来日については、自身の作品『日本の女性作家たちを追憶する』（『憶日本の女作家們』、1961年）、『桜を賛美する』（『桜花賛』、1961年）、『日本から帰国』（『日本帰来』、1961年）、『訪日後の印象と感想』（『訪日観感』、1964年）などで、滞在中に起こった出来事や日本に対する印象が断片的に語られている。本発表では、新たに発見した3回目、4回目、7回目の来日に関する資料を用いて、謝冰心の日本訪問の全体像のさらなる解明を試みる。

例えば、3回目の来日後の1951年8月、謝冰心一家は突如として帰国の途についた。当時、謝冰心の夫・呉文藻（1901-1985）はアメリカのイェール大学に招聘されていたが、それを蹴ってまで新中国に戻った理由はこれまで不明であった。今回新たに発見した新聞記事によれば、謝冰心は自らの理想と新中国の今後の方針が合致していると感じていたという。謝冰心は新中国に対して大いに期待するところがあったため、無理をおして帰国した可能性がこの資料から示唆される。

このように、本発表では日本で報道された謝冰心の来日中の行動を当時の新聞や雑誌を糸口に整理し、謝冰心と日本の女性作家との交流、日中文学や女性問題についての語り合い、日本人に対する気持ち、日本人女性への期待、東京帝国大学における講演「中国文学を如何に鑑賞するか」の具体的な時期及び内容などを解明したい。それによって、日中友好事業に尽力した謝冰心のさらなる真髓を探りたい。